

ひょうご 水百景

No.81 都志川・川池堰堤（洲本市五色町都志大宮）

～豪商・高田屋嘉兵衛が故郷の発展に尽力した最初の事業～



写真-1 川池堰堤（平成25年5月撮影）

■ 幕末の豪商・高田屋嘉兵衛が郷土の発展に尽力した最初の事業～川池堰堤の築造

写真-1は、洲本市五色町都志大宮地先の主要地方道46号洲本五色線沿いを流れる都志川に築造された石造の堰堤で、幕末の豪商・高田屋嘉兵衛（たかたやかへえ）が、生まれ故郷の発展のために尽力した最初の事業です。

司馬遼太郎の小説『菜の花の沖』の主人公・高田屋嘉兵衛は、明和6（1769）年1月1日、淡路島の都志本村（つしほんむら：現・洲本市五色町）で百姓の子として生まれました。

寛政2（1790）年22歳で兵庫に出て樽廻船の水主（かこ）となり、寛政8（1796）年28歳で辰悦丸（当時、国内最大級の千五百石積の舟才船）を建造して独立した嘉兵衛は、翌年新たな可能性を求めて蝦夷地に渡り、箱館を本拠地として本格的に海運業を始めます。

商人として、また船乗りとしての才能を認められた嘉兵衛は、幕府の命を受けて千島方面の航路を開き、択捉島や根室などに多数の漁場を経営し、これが昭和50年代末期まで隆盛を誇った北洋漁業の先駆となっています。

嘉兵衛が蝦夷地で活躍している時、日露間の通商交渉のもつれに端を発した双方の誤解から、ロシア船ディアナ号のゴローニン艦長が幕府警備隊に捕らえられるという事件が起こりました。その後、ゴローニンたちの無事確かめようと国後島近くを航海していたディアナ号に偶然近くを航行していた嘉兵衛らが捕まり、カムチャッカに連れて行かれます。嘉兵衛は囚われの身にもかかわらず、お互いの誤解を解くためにディアナ号の副艦長・リコルドと誠意をもって話し合い、折衝役として日露両国を説得し、ついにゴローニンたちを釈放させることに成功します。

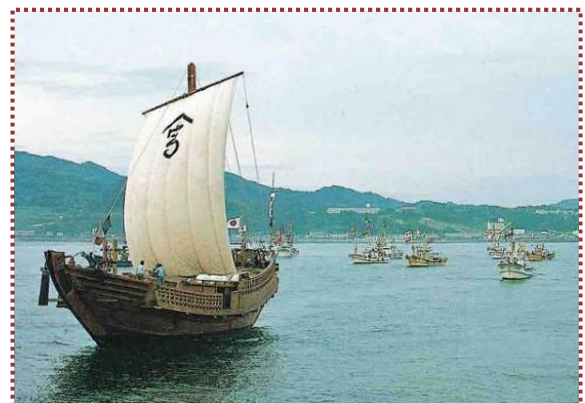


写真-2 輪島港に入港する復元北前船「辰悦丸」

（『夢とロマンを満載して北前船』から引用・加工）

ゴローニン事件の解決により日露関係の悪化を防いだ嘉兵衛は、商人としての才があっただけでなく大変な人格者であり、鎖国時代の日本において稀にみる国際人であったそうです。

写真-3 は、ウェルネスパーク五色・高田屋嘉兵衛公園に立つ高田屋嘉兵衛翁とゴローニン提督の像（「日露友好の像」）で、嘉兵衛の没後 170 年と日露国交回復 40 周年（1956 年）を記念して建立されたものです。

事件が解決し帰国した嘉兵衛は、8 ヶ月にわたる抑留生活で疲れきってしまい、50 歳で弟・金兵衛に店を任せ淡路島へ戻ります。帰郷した嘉兵衛は、港や池、道路、橋を改築するなどふるさと淡路の発展のために尽力します。



写真-3 高田屋嘉兵衛翁とゴローニン提督の像

晩年の嘉兵衛は、菜の花の咲き乱れる都志から沖を行き交う船を眺めるのが何よりの楽しみだったとか。文政 10（1827）年 4 月 5 日永眠。享年 59。

嘉兵衛が晩年を過ごした都志の屋敷は、敷地が 543 坪あり、母屋・裏座敷・西座敷・土蔵・厩などが建つ豪壮なものでした。現在、屋敷跡は整備され、高田屋嘉兵衛記念館（平成 29 年 3 月閉館し、ウェルネスパーク五色にある高田屋顕彰館に統合）や記念碑が建てられています。

下の写真-4 は、屋敷跡に建てられた「高田屋嘉兵衛翁記念碑」、右端の写真-6 は、同じく「高田屋嘉兵衛翁像」です。



写真-4 高田屋嘉兵衛翁記念碑



写真-5 史蹟 高田屋嘉兵衛
旧邸跡の標柱

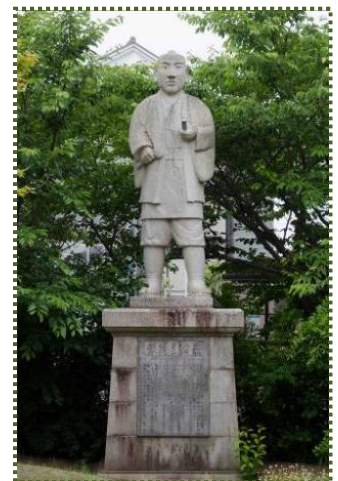


写真-6 高田屋嘉兵衛翁像

■ 川池堰堤の築造

川池堰堤は、文政 6（1823）年嘉兵衛が 55 歳の時に築いた灌漑目的の施設で、『高田屋嘉兵衛翁傳』によると堰堤築造の経緯は概ね以下のとおりです。

「都志本村および宮村（大宮）、両村の耕地約四十町歩（≒40ha）に灌漑すべきため池が不十分ことから、文化・文政の頃しばしば干害を被るので、田主人（たすにん）たちが計画して川池を宮村字井手の川筋に築こうとするが、莫大な費用を要するため容易に着手の運びに至らず。

これを聞いた嘉兵衛は、有益な計画があるのに費用の点で躊躇するのはいかにも気の毒なことと思い、文政 6（1823）年これを手伝うこととし、ほとんど全額の費用を引き受けて堰堤の築立に着手した。高田屋普請の名によって工事は着々と進行し、わずか半年にして川池堰堤は完成、満々と水を湛えた姿に両村の農民は愁眉を開くこととなった」（意訳しています）とあります。

堰堤内部がどのような構造かは不明ですが、川池であることから、おそらく土堰堤の表面に石を張って少々の越流には耐えられるようにしたのではないのでしょうか。なお、ヨケ（洪水吐）は、右岸の岩盤を開削して設置されています。

ただ、農民の愁眉を開いた川池堰堤は、その後の「酉の年の大水」と呼ばれた秋の大洪水の際、上流の鮎原方面から流されてきた家屋がヨケを塞いだため、洪水が堤体を越流し堅固に築造した堰堤は崩壊してしまったそうです。

「酉の年」がいつなのか出典である『高田屋嘉兵衛翁傳』に記載はありませんが、『五色町史』を見ると、堰堤完成以降の江戸時代に発生した洪水は 11 件、そのうち酉年は文政 8（1825）年と天保 8（1837）年で、発生日は奇しくも同じ 8 月 14 日です。文政 8（1825）年であれば嘉兵衛存命中であり、天保 8（1837）年であれば嘉兵衛没後となります。いずれにしても、『高田屋嘉兵衛翁傳』の中で、「道路橋梁等を修築せし事も数知れず。これらは只一度修

築せしに止まらず。破損するたびに年々修補を加え、あたかも自家責任を負えるもののごとき有様なりしとぞ。」と記載されているように、嘉兵衛の存命中、没後に関わらず高田家が再築の費用も負担したと思われます。

また、かつて都志本村にあった「新池」(地図参照)は、文政8(1825)年、嘉兵衛が57歳の時に、金24両2分(当時の米に換算して30石※1に相当)を寄付して川池堰堤の下流、約800mの地に築造されたものです。ただ、昭和47(1972)年2月発行の国土地理院1/25,000の地図には「新池」の記載がありません。田主の方に聴くと「その頃、新池は水が貯められていたようではあるが、水田面積の減少、生産調整などでほとんど利用されていなかった」とのこと。では地図は測量漏れか、という疑念が出てきますが、いずれにしても昭和末期ゴルフ場への道路を建設する際に埋め立てられたそうです。(ゴルフ場は平成5年4月オープン)

※1 石(こく): 尺貫法における体積(容量)の単位の一つ。日本では、1食に米1合、1日3合が概ね成人一人の消費量とされているので、1石は成人1人が1年間に消費する量にほぼ等しいと見なされている。

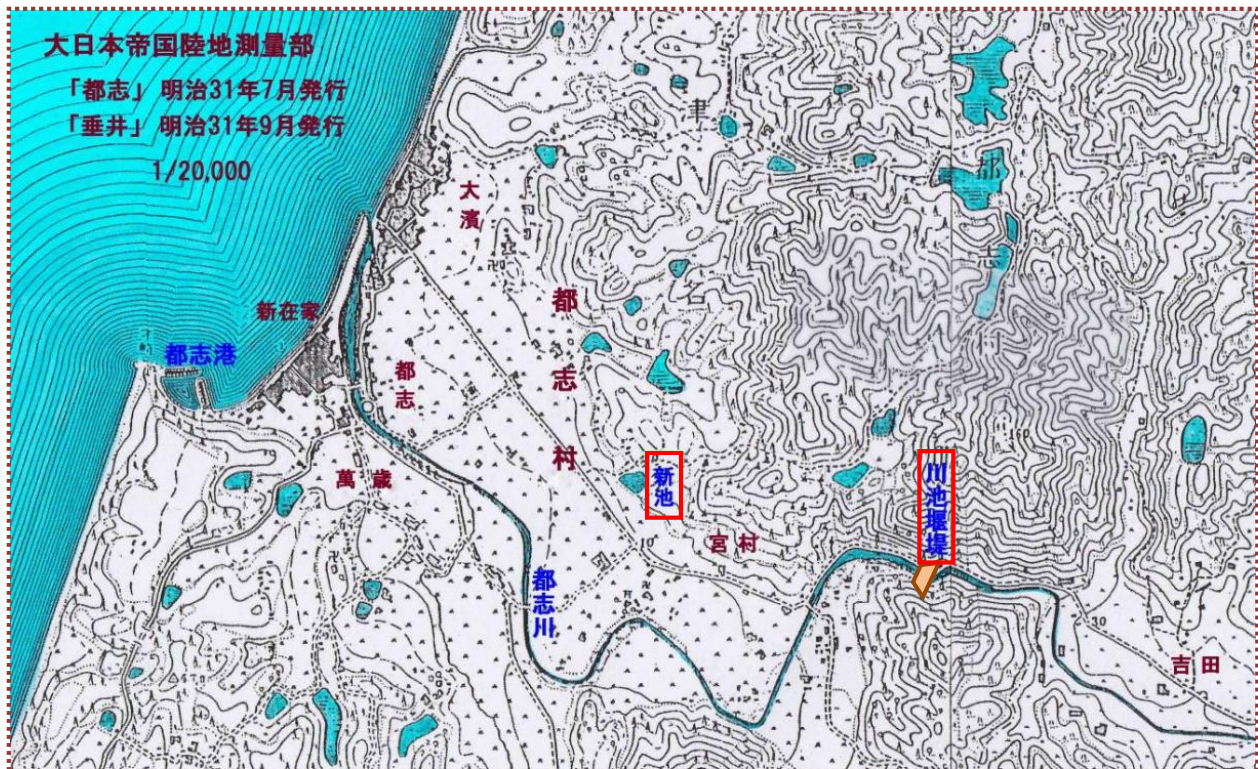


図-1 明治31年頃の都志村

■ 昭和5年の大干ばつを契機に井堰を改修

昭和5(1930)年夏に大干ばつがあったため、翌昭和6(1931)年に近代式の堤体に改修されています。恐らく、老朽化に伴う漏水量の増加により貯水効率が低下していたことから遮水性の向上を図るため、堤体の上流面にコンクリートを張ったものと思われます。



写真-7 川池堰堤の上流面



写真-8 川池堰堤 右岸天端から左岸方向を見る

また、この時に堤体を
を1m近く嵩上げしています。写真-8では、その嵩上げコンクリートが見えます。

■ 兵庫県南部地震で被災し漏水量が増加

平成7(1995)年1月17日に発生した兵庫県南部地震により川池堰堤も被災したそうです。堤体が崩壊するようなことはありませんでしたが、漏水が増加したため震災の採択を経て上流面にコンクリートを増し打ちし、併せてオリフィスゲートの巻き上げ機を設置しています。

ゲートの巻き上げ機



A photograph showing a concrete weir structure. A blue arrow points to the water flow area on the left side of the weir. The structure is made of concrete and has a sloped surface on the right side. The background shows some green vegetation.

洲本市

五色町

都志港

高田屋顕彰館

新池跡

川池堰堤

都志川

300m

国土地理院地図 (電子国土Webを加工)

- 4 -

■ 幸せの黄色いラッパイチョウ

高田屋嘉兵衛屋敷跡には、全国的にも大変珍しい「ラッパイチョウ」と呼ばれる木があります(写真-15)。この木はイチョウの変異種で、通常の扇状の葉に交じってわずかながらラッパ状に巻いた葉をつけます。畿央大学(奈良県)の辻啓介教授らが昭和30年代に篠山市の医王寺で発見、全国でも30本ほどしか確認されておらず、そのうちの3本がこの屋敷跡にあります。

嘉兵衛屋敷跡のラッパイチョウは、40年ほど前に、都志小学校の4年生が発見、当時教頭だった植物研究家の南光重毅さん(筆者も洲本土木勤務の頃一度お会いした記憶があります)が確認したものだそうです。

ラッパイチョウの葉を見つける
と幸せになれるそうで、過日、筆者もラッパ状のイチョウの葉を探してみましたが、数分の間に「幸せの黄色いラッパイチョウ」を3枚見つけました。このラッパ状の葉は、時間が経つと開くものではなく、落ちてラッパ状のままだそうです。

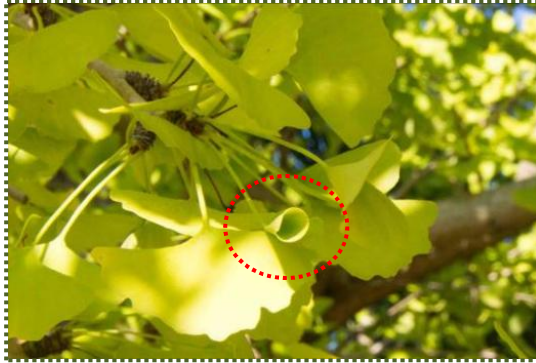


写真-14 ラッパイチョウ



写真-15 ラッパイチョウ

■ モノローグ

今回、「川池堰堤」を書くに当たって、高田屋顕彰館や閉館前の高田屋嘉兵衛翁記念館に行って調べ、現地も3回ほど足を運び、『五色町史』も読みましたが、なお多くの疑問が残されていました。

そこで、M農地整備課長に話を繋いでいただいて、洲本市の船越産業振興部長、宇城農地整備課長、金谷市民生活部長(縄手田主)にお聴きし、さらに高田屋嘉兵衛翁顕彰会理事長の高田耕作さんにもいろいろと教えていただきました。高田さんは高田屋本家筋の子孫だそうで、旧五色町、合併後の洲本市で主に総務畑を歩いてこれ、退職後は顕彰会の理事長をされています。(写真-16: 右が高田さん、左が筆者、洲本総合庁舎にて)

なお、嘉兵衛が郷土の発展のために力を注いだ事業として、川池の他に都志港と塩尾港があります。高田さんから貴重な資料(参考資料3)をいただいたので、次回これらを書こうと思っています。



写真-16 高田耕作氏と2S

マガモ(真鴨)

カモ科の鳥。非繁殖期は、湖沼・河川・海岸に生息し、群れを形成して生活する。越冬中の10月末～12月につがいを形成し、春には雄雌が連れ立って繁殖地へ渡る。繁殖期は湖沼・池・湿地の周辺の草地などに生息する。右の写真-17は、平成25(2013)年5月末に川池堰堤直下で撮影した雄のマガモ。群れからはぐれてしまったのか、何となく寂しそうだった。



写真-17 川池堰堤直下の水辺に佇む雄のマガモ

【参考資料】

- 1 『洲本市史』 洲本市 昭和49年10月
- 2 『五色町史』 五色町 昭和61年9月
- 3 『高田屋嘉兵衛翁傳』 高田権平 編集兼発行 昭和8年11月
- 4 『辰悦丸(復元北前船)、マガモ』 Wikipedia

※発行：平成30(2018)年2月 『ひょうご水百景』No.81

改訂：令和8(2026)年4月 『ひょうご水百景』No.81